

きずな

いのち。つながるマガジン Vol.15
2025.3

いま君へ、

いのち

つながる

橋わたし

立教開宗八〇〇年

西念寺 (稲田の草庵)
聖人見返り橋

立教開宗の願いをうけて

長野教区教務所長

酒井隆哲

2024年10月に、長野教区・本願寺長野別院「親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要」並びに「本願寺長野別院創立百周年記念法要」を、多くの皆さまにご参拝をいただき、無事盛大におつとめすることができました。これもひとえに、長野教区の御寺院のみなさまや門信徒のみなさま、有縁の多くの方々のご理解・ご協力・ご協賛のおかげであると、深く感謝を申しあげます。

宗祖親鸞聖人は承安3年(1173年)にお生まれになりました。当時は、戦乱や飢饉など、明日の命さえ知れぬ世の中でした。そんな中、親鸞聖人は九歳で得度され、生死いづべき道を求めていかれました。そして出遇われたのが、阿弥陀如来のご本願でありました。今の時代にあっても、武力紛争や飢饉、経済格差、差別を含む人権の抑圧など、世界規模での人類の生存に関わる困難な問題が山積しております。何事も自分優

先・自分中心、なんとも心寂しい時代と

なっています。科学技術は進歩しても、心の中は親鸞聖人の時代と何も変わっていないのかもしれない。

私たちの宗門(浄土真宗本願寺派)では、「あらゆる人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝え、もって自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現」をめざして「御同朋の社会をめざす運動」(実践運動)を推進しています。

この運動は、「本願を究極の依りどころとして生きられた親鸞聖人に学び、つねに全員が聞法し全員が伝道して、わたくしと教団の体質を改め、差別をはじめとする社会の問題に積極的にとりくみ、御同朋の社会をめざす」基幹運動の成果と課題を踏まえ、さらにみ教えを宗門内外に広く伝えていき、同朋教団として非戦・平和、差別・人権の問題に取り組みながら、多様な活動をより広く実践していくことをめざして、2012(平成

24)年に始まりました。

私たちは、親鸞聖人がお示しくくださった浄土真宗のみ教えに出遇うことがなければ今の私はありません。この感謝や喜びと共に、阿弥陀如来のご本願を究極の依りどころとして生きられた親鸞聖人のお姿に学び、自分自身の姿を問い直しながら歩みを進めていかなければなりません。

2024年に立教開宗800年目を迎えて、これからも歩みを止めることなく、「自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現」をめざし、親鸞聖人が「世のなか安穏なれ、仏法ひろまれ」とお示しくくださったお言葉を受け止めつつ、常に我が身を振り返りながら、「御同朋の社会をめざす運動」に、みなさまと共に参画・実践していくことができればと思います。

濁世に生きる

「御同朋の社会をめざす運動」
(実践運動)

中央委員会報告と現況について

今年度開催されました中央委員会での内容を要点のみ報告させていただきます。報告事項として・宗門重点プロジェクトの現状等について・2025(令和7)年度から施行する新たな宗務部門職制について・宗門におけるジェンダー平等の取り組みについて・平和に関する論点整理(戦後80年版)について報告されました。協議事項として高岡教区より「意見具申と中央委員会の報告を『宗報』に掲載することを求めます」「戦後80年にあたっての非戦平和・ヤスクニ問題に関わる宗派声明を出すことを求めます」の2件について協議され、宗報掲載については各教区より賛成の意見が出され、宗派としても協議内容を精査しながら掲載する運びである旨の回答がありました。「宗派声明」については中央委員会として宗派に声明を出す事を要望する、と全会一致で決定されました。

今年度の委員会を通じて個人的に強く感じることには、「宗門におけるジェンダー平等の取り組み」についてであります。宗派のジェンダー平等推進委員会は2024(令和6)年6月12日付にて設置されたばかりであり、

答申書にも記載されているとおり課題も多くジェンダー平等に取り組む宗派の弱さが露呈していると感じます。特に短期的課題として掲げられている「ジェンダー平等推進に取り組む専門部署、相談窓口の設置」については「宗務組織機構内に権限を有し独立した専門部署を設置すべきである。併せて、性差別・ハラスメント事案の発生に対処でき、なおかつ、包括的に対応できる相談窓口の設置が必要である」と記載されています。これは早急に対応されるべき案件であると感じます。また、昨今の教区における状況に鑑みてもこのような対応の必要性を感じます。

長野教区における重点プロジェクトの実践目標は「濁世に生きる」1違いを超えて豊かに生きる1と掲げられています。濁世とは阿弥陀経に五濁と示され、その内の一つである命濁について「自他の生命が軽んじられ、また生きていくことの意義が見失われ、生きていくことの意義が実感できなくなり、人びとの生涯が充実しない虚しいものになってしまうこと」であると、大谷派僧侶の古田和広師が解説されています。それは昔のことではなくまさに、今が生きにくい世の中であり、その背景には意見や価値観が違うと切り捨てられ排除され分断されていく現代社会の有りようで実践目標である御同朋の社会の実現とはほど遠い社会であります。

法律関係者と話をさせて頂く機会があり、その時に「民主主義とは単に多数決で物事を決めていくことではなく、すべての人を平等に尊重して、声なき声にとことん耳を傾け、少数者の意見に最大限配慮してゆくことなんです」と教授して頂きました。1881年に宗会が帝国議会に先駆けて設立された歴史

や、宗門が国家と同じような権力分立の構造を持つている意味を改めて問い直し、親鸞聖人が「御同行・御同朋」と敬われた念仏者一人ひとりの声を大切にすることこそが私たちの宗門のあるべき姿ではないでしょうか。そして阿弥陀仏が「すべての生きとし生けるものを決して見捨てない」と誓われた「摂取不捨」の心に通じます。私たちは、御同朋の社会の実現に向け、実践運動を推進していきます。その中には主張の違いや価値観の相違が生じることも考えられます。現に宗派においてもそのような事例が見受けられます。しかし、お互いの主張を正義にしてしまうと対決になり、排除され、勝ち負けと判断されてしまいます。

仏教思想家の曾我量深師は「いつも答えの側に立ってしまう僧侶ではないけない」との言葉を残したそうです。自身に問うことを忘れず、答えを得たつもりになっていないと、教えを自らの答えのごとく振り回してしまおう、それが正義となり相手を否定し分断が生じて対決となります。しかし、私たちは阿弥陀仏の願いをいただく身と知らされたならば、自身の正義で他を傷つけてしまおうかもしれないと気づかされ、他の人の価値観も認め、お互いが尊重し合うことで課題や問題も解決していけるはずだと思えます。

親鸞聖人は濁世を生きるために必要なものを「濁世の目足」と示されています。今まさに濁世に生きる私たちはみ教えに問い、ともに聞きとり、たしかめあって行くことこそが大切であり、その歩みが立教開宗の願いを聞かせて頂くことではないでしょうか。

(実践運動長野教区中央委員会
宇佐美智行)

令和6年能登半島地震

ボランティア活動に参加して

能登の現状と見えてきた課題

【はじめに】
能登は、浄土真宗のご法義地。2024年6月と7月の2回、石川教区教務所内浄土真宗本願寺派 能登半島地震支援センターに伺いボランティア活動に参加してまいりました。各回とも、全国から集ったボランティアの方々との協働となりました。

【活動内容の報告】

活動前日に1時間程度のミーティングが行われます。内容は、①当日の活動報告と振り返り、②翌日の参加者の顔合わせと活動予定の確認です。コーディネーターさんが参加者の構成を基に活動を選択し、翌日のボランティア計画を立案します。参加者の人数や構成によって、様々な活動が決められるようです。ですから、どんな方でも活躍できます。

6月の活動

6月18日のミーティングは嶋倉崇信さん（長野教区教務所職員）が参加。能登島での活動になりました。

6月19日、車3台に分乗し7時30分金沢別院出発。途中、コンビニで昼食を調達。6月18日のミーティングは嶋倉崇信さん（長野教区教務所職員）が参加。能登島での活動になりました。

7月21日7時30分出発、9時10分現地着、作業開始。昨日に引き続きブロック塀の撤去・鉄筋の切断・瓦礫の搬出。処分場へ災害ゴミ搬送。午後は一般住宅のお仏壇等の解体・搬出・木製タンス等の搬出・積み込み。別動隊1名が別院内支援センターの備品整理・洗浄、掃除。15時15分作業完了、現地発。17時10分着、18時ミーティング終了。夜、帰長。

【感じた課題】

現地コーディネーターの方も、ボランティア活動に参加された方も、皆さん一生懸命です。被災された方に寄り添った活動をされています。そのことに敬意を表しつつ、見えてきたこと・・・。まず、支援センター（金沢別院）と被災地はだいぶ距離があります。七尾市まで片道2時間弱、輪島市等奥能登だと往復だけで一日が終わってしまいます。現地に支援拠点が欲しいと感じました。

そして、活動を支える上で不可欠なカネ、ヒト、モノの内、カネが圧倒的に足りない。故に必要な部署に十分なヒトを配置できない。それ故の「コーディネーター専従者の不在」。現地案内役が存在しないため、やむを得ずコーディネーター

達。能登島半浦の妙万寺さんが車両基地となっており、トラックをピックアップして現地向かいます。車窓からは、倒壊した家、立入禁止の紙が貼られた家、生活を続けておられる家が混在している様子が伺えます。

途中3カ寺ほど立ち寄り、被災状況を拝見しました。山門が倒壊し、庫裏が全壊となった寺院、鐘楼が基台とずれてしまいワイヤーで固定している寺院など、いずれも甚大な被害を被っています。屋根瓦もずれ落ち、雨漏り等の二次被害も深刻です。しかし、住む家を失ったご門徒さんの生活再建が最優先であり、寺院の補修・復興は計画すら立てられない状況とお聞きしました。

今回は男性チームが倒壊した網小屋での作業、女性チームは被災寺院の備品の整理（使えるものと破棄せざるを得ないものとの仕分け作業）と境内地の草取り、を行います。倒壊した網小屋の撤去作業は、継続した活動です。以前の活動で選り分けられた柱・屋根材を、斧やチェーンソーを用いて切断し、ボルト等の金具を外します。可燃と不燃を分別すると公



さん自身が日中のボランティア活動に参加し陣頭指揮をされています。そのため、依頼を整理し、優先順位を考え計画を立てる役割の方が存在しない。

ボランティアが作業内容を選ぶようなことはよろしくない、という意見もありますが、2回の活動共、お仏壇の解体・搬出を除き、住居ではない建物の清掃・片付けは生活支援と言えるかは微妙です。また、ブロック塀の撤去は公費解体の対象外となっている作業。本当に困っている方に、私たちの活動が届いているのか疑問です。

支援要請が来る前から現地に足を運ん

費処分場に持ち込むことができるからです。その後、トラックに積み込み、処分場へ搬出。2回分、計1・33トンの木材を撤去しました。作業開始が10時30分、16時現地発、別院着18時15分。ミーティング19時終了。

昼食は、網小屋の所有者さんから冷たい飲み物を提供いただきながら、コーディネーターさんを中心に依頼者さんとの会話が弾みます。物理的な支援と併せ、メンタルケア（精神的支援）も大切なのだなと感じました。

7月の活動

7月19日18時ミーティング参加。週末の3日間、本願寺の職員さんが3名ずつ交代で支援センターに向われ、活動に参加されています。他に東海教区より1名参加。

7月20日8時別院に集合、出発。10時現地着。七尾駅に近い市街地にて作業開始。倉庫2階の家具の解体・搬出作業。引き続き、不要物（紙類・衣類・雑誌・ビデオなど）の搬出・積込



で被災地域住民の声を聴き、寺を中心とした地域コミュニティにとって本当に必要な活動を掘り起こし、被災された方と共に支援内容を相談・立案し予算を立て、本願寺や国、自治体と交渉し資金と人材を調達する、本当の意味でのコーディネーターをする人が必要です。そしてその役割は、御同朋の社会を目指す私たちが平素から担うべき本来の役割、とも言えるのではないのでしょうか？

【最後に】

能登では「たすけて」と声を上げること無しに生活再建をあきらめ、地元を離れる方が大勢いらっしゃると思います。ご法事は仏壇仕舞い（遷仏法要）や墓仕舞いばかり。ご門徒が居なくなってしまう、寺院の再建どころではない、というお寺さんの嘆きや心配する声も聞こえてまいります。

私たちの故郷も少子高齢化が進み、人口減少問題に直面しています。法を継ぎ紡ぐ者が居なくなる不安は、決して他人事ではありません。

まだまだお手伝いできることがたくさんあります。今しっかりと考えなければならぬことが、ボランティア活動を通して見えてまいります。私の見方を変えてくれるご縁と感じています。

（行事広報部会 峰川暁見） 合掌

令和六年能登半島地震支援活動報告会より

今、私たちにできること

激甚災害となった能登半島地震が発生して一年、ビハラー長野主催の支援活動報告会が二〇二五年一月二十三日に開催され、宗派社会部災害対策担当で能登半島地震支援センター・コーディネーターの篠原法樹さんが報告を行った。以下、要旨と所感とする。

地震発生三日後に宗派ボランティアセンター（以下ボラセン）が立ち上がるが、人命救助とライフライン復旧を優先する行政判断により、ボランティア受け入れと活動が制限され、X（旧ツイッター）・インスタグラムを開発して支援物資や現地情報等の発信を行う。能登特有の地形による影響で道を阻まれ、支援物資の運搬や支援活動にも支障が生じ、また相応した孤立地域の多さも特徴的だ。

被災中心地となった石川県には真宗寺院が約千ヶ寺ある（うち本派は九十八ヶ寺）が、宗教法人の施設等への関わりは行政・社会福祉協議会等のボランティアは難色を示す場合が多く、寺院における作業は宗派ボランティアに依存される。撤去・解体作業には動力機械が有益であるが、被災門信徒による寺院支援の姿は、念仏息づく土徳を実感させる。

東日本大震災から震災支援に携わる篠原さんは、寺院関係者から復興の段階を尋ねられることが恐怖だと語る。肌感覚として「能登は復興どころか、復旧すらしていない」と受け止めているからだ。地域のみならず寺院の復興を考えると、高齢化や過疎のために門信徒や寺族が金沢や周辺地域に避難や生活基盤を持つ現状で、既成のコミュニティが崩壊し、作業においても仏壇搬出作業の約八割が仏壇処分をする状況に鑑みれば、寺院の今後の展望は決して明るいとはいえず、何を

もって寺院復興とするのか答えが出せないという。

また、当初より能登の立地や東日本大震災から続く災害の影響で支援熱が低調なところに、時の経過の中で報道が無くなり風化して関心が薄れていくことを実感する昨今、「もう復興したのか」という勘違いが障壁となるのが憂慮されている。

実際、被災は継続されているのだ。二〇二五（令和七）年一月現在、犠牲者は五一五人で、うち直接死は二二八人、災害関連死は二八七人（審査中二五〇人）である。関連死の主な原因は、慣れない環境によるストレスや、災害の影響による不十分な医療体制と指摘されており、自死も少なくない。つまり、防げた死があるということだ。助けることができるいのちを見据え、話し聴き合いつながるこ

令和6年能登半島地震 活動記録

【宗派～支援センター】

設置日	2024（令和6）年1月8日
登録者数	412人（出向職員93名、ボランティア319名）
活動者数	2,188人（出向職員、事務局含む延べ人数）
宿泊者数	1,258人 ※支援センター宿泊者
活動内容	・片付け、清掃（寺院） ・片付け、清掃（門徒宅等） ・サロン活動（お茶会） ・炊き出し、炊き出し補助 ・その他、物資搬送等

【教区】（令和6年）

3月4～6日	出向者：長原真了（河西組善立寺） 活動内容：宗派支援センターを通じて片付け作業（災害ゴミの仕分け） 場所：能登島-浄尊寺
5月27～29日	出向者：中島清志（事務相談員）・笠原隆彦（長野教区教務所職員） 活動内容：宗派支援センターを通じて片付け・解体作業 場所：能登島-浄尊寺門徒宅
6月18～19日	出向者：峰川暁見（河西組専福寺）・嶋倉崇信（長野教区教務所職員） 活動内容：宗派支援センターを通じて片付け作業 場所：能登島-浄尊寺門徒宅
7月19～21日	出向者：峰川暁見（河西組専福寺） 活動内容：宗派支援センターを通じて片付け・作業

※他、教区・ビハラーより支援物資、りんご等提供

ミニティー作りとして、宗派ボラセンによる「ご縁サロン」が二〇二四（令和六）年十月に開設された。支援する側・支援される側ではなく、お互いさまの関係性が求められる。まさに宗門ビハラー活動は、人々の苦しみに共感し、本当の安らぎとつながりを育てるものだ。災害支援には、特殊かつ身体を使う活動以外にも、金銭支援や物資寄付で貢献すること、自分に見合ったボランティア参加で復興支援、情報発信で支援を拡げる等できることは必ずあり、一人ひとりの行動が大きな力に変わる。「私」は微力ではあるが、無力ではないのだ。

（行事広報部会 長原真了）

非戦の鐘

リーフレット制作に思うこと



2025年は、日本がはじめた戦争に敗れてから80年という節目を迎えます。80年の歳月が流れ、戦争を直接経験した人が少なくなり、今や戦争を知らない、経験をしていない世代が大半を占めるようになりました。そのため、8月6日（広島市に原子爆弾が投下された日）、8月9日（長崎市に原子爆弾が投下された日）、8月15日（日本が戦争に負けた日）が何の日であるか、わからない若者が増えています。

しかし、今、世界に目を向けてみれば、ロシアによるウクライナ侵攻や中東のイスラエル―パレスチナ戦争等、争いが未だ絶えず、この時代においても多くの武力衝突が続いています。

では、日本はどうでしょうか。戦争がない平和な国でしょうか。ひとつに、沖縄に背負わせてしまっている基地問題を考えますと、決して日本も戦争と無関係ではない現実があり、決して戦争のない平和な国とは言い切れません。戦争は過去のものではなく、今なお影響を残し、「日本は大丈夫」という確証はどこにもないのです。だからこそ、「非戦の鐘」を鳴らすことに大きな意味があります。

本年新たに「非戦の鐘」のリーフレットを制作するにあたり、社会問題部会で多くの意見を交わし、子どもたちに伝わ

りやすいように工夫しながら、制作を進めることになりました。また、「平和の鐘」ではなく「非戦の鐘」とした理由について議論する中で、「平和の鐘」とした方がわかりやすいのではないか、という意見もありました。

しかし、「平和」という言葉は、時に武力の上に成り立つこともあります。一方で「非戦」という言葉は、「戦争をしない、させない」という明確な意味を持っていきます。そこに「平和の鐘」ではなく「非戦の鐘」とする意味があるので、戦争の反省に立ち、悲惨さや決して繰り返してはならないことを伝え継いでいくこと、また私たちは戦争被害国だけではなく戦争加害国であることも決して忘れてはならないと考えます。

リーフレットを手にした子どもたちが、「非戦の鐘」を通じて何を感じ、何を思うか。そして感じたことを多くの人たちと話し合ってもらい、改めてともに戦争について思いを巡らせ「非戦」について向き合うきっかけになればと思います。

（社会問題部会 宮本祐慈）

「みんな同じ」を出発点に

— 千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要
団体参拝報告 —

2024年9月17日、18日の2日間、毎年恒例の千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要への長野教区団体参拝が行われました。17日には、築地本願寺で実施された「平和フォーラム2024」に参加し、国境なき医師団日本会長で、救急医・麻酔科医の中島優子さんの講演を聞かせていただきました。そして18日には、戦中・戦後の人々の暮らしを伝える施設「昭和館」を訪れ、その後国立・千鳥ヶ淵戦没者墓苑での追悼法要に参加しました。

平和フォーラム2024で登壇された中島優子さんは、「国境なき医師団の活動から戦争を考えると」というテーマで講演されました。「国境なき医師団」は紛争や自然災害などで危機に直面する



人たちに、独立、中立、公平な立場で医療を提供する非営利団体です。医療活動と同時に証言活動も大切な使命で、医師団のスタッフが目の当たりにした現状を動画などにまとめ、世界に発信することも大切に行っているそうです。

これまでシリアやガザで活動したという中島さんは、紛争の最前線で自らも危険にさらされながら医師としていのちと向き合い続けられました。そんな中島さんが実感を込めて語られていたのが、「どの国の人も、どの地域の人も、みんな同じ人間」ということです。ケガや病気の人を心配する心、大切な人を思いやる心、張り詰めた空気を緩める子どもたちの笑顔。これらは様々な地域で中島さんが接した人たちに共通するもので、ここを出発点にすれば、争いのない世界への一歩が踏み出せるのではないかとというお話が印象に残っています。

この度の追悼法要のパンフレットには、親鸞聖人の「世のなか安穩なれ、仏法ひろまれ」という言葉が記されています。この「仏法が広まった世界」とはどのような世界なのでしょう。阿弥陀さまは、すべてのいのちを分け隔てせず、自分と一体とみてくださる仏さまです。自分のいのち、他者のいのち、と分けるのではなく、同じものと捉えていく見方です。争いの現場には、自国と他国、自民族と他民族、敵と味方という境界が必ずあるように思います。阿弥陀さまの眼

差しのなかで生きる私たちは、「みんな同じ人間」であることを大切に生きていく、それが広がった世界が「仏法が広まる世界」なのではないでしょうか。そして、仏法



が広まった世界には、自然と安穩が訪れるのだと思います。

今年度の追悼法要団体参拝に参加して、団体参拝も、追悼法要自体も、若い世代の参加者が少ないことが気になりました。戦後80年を迎えようとしている今、戦争は遠い昔の時代のもの、遠い場所で見聞きしているものという印象が強く、自分ごととして捉えることが難しいのかもしれない。しかし、国境なき医師団が発信している動画を見ると「戦争をして良い理由など何もない」ということがすぐに理解できます。このような発信に触れること、そして、みんな同じ人間、同じいのちという想像力を持って日常を歩んでいくことが、私たちにできる平和への第一歩ではないかと考えさせていただきました。（行事広報部会 海野紀恵）

〈表紙について〉 稲田の草庵で『教行信証』（1224年）が撰述されて800年。親鸞聖人「見返り橋」での眼差しに、今の時代と私たちがどう映し出されているだろうか。